

## William R. LaFleur 教授の”Peripheralized in America: Hans Jonas as Philosopher and Bioethicist”にたいする質問

2009年2月21日 於 京都大学

品川哲彦 (関西大学 t990019@ipcku.kansai-u.ac.jp)

ラフルーア先生、啓発的なご講演をありがとうございました。アメリカにおけるヨナスの受容、理解のされ方がよくわかりました。私は、カスがヘイスティングス・センター・レポートの特別号「ヨナスの遺産」に載せた文章(1)とカスの著書『治療を超えて』(2)をあわせ読んで、カスがヨナスを称賛していることはかえってヨナスの正当な評価を妨げるおそれを感じていました。というのも、彼の論旨は理論的基礎づけというより宗教的かつ政治的にみえるからです。したがって、ラフルーア先生のご指摘に私の懸念が裏付けられたのを喜んでおります。また、先生は、ヨナスがハイデガーの弟子であるというウォーリンのヨナス解釈の一面性を批判し、この印象のためにユダヤの生命倫理学者たちもヨナスの研究に立ち入らないと指摘されました。これらの説明は、なぜ、アメリカではヨナスに正当な名誉が与えられないのかを読み解く鍵として貴重です。私には、ヨナスが1964年にアメリカで行った講演「ハイデガーと神学」(3)はもっと読まれるべきだと思います。とくに80年代以降、ハイデガーのナチスへの協力に関する研究が進んだ今、あらためて読みなおされるべきでしょう。

さて、しかしまた、先生の指摘されたヨナスの周辺的位置づけにはヨナス自身にもその一因があるように思います。ヨナスを批判するためではなく、彼の倫理学と哲学についてのよりいっそう統合的な解釈を得るために、私は三つほど問題を提起したいと思います。第一は、きょう、先生はヨナスの生命倫理学への寄与、とりわけ彼の脳死論の背景に「古代ユダヤの預言者にたいする賛嘆」を指摘されました。これにたいして私は、ヨナスの生命倫理学における主張の根拠を何に求めるべきか、彼の著作の統合的な解釈とどのように関係させるべきかと問いたく思います。第二は、私は戦後における彼の生命哲学が師ハイデガーからの離反に裏づけられていると考える者ですが、しかしまた、彼の依然として続く存在論への関与をどう考えるべきかという問題です。第三は、きょう、先生も言及されましたハーバマスの著作に関連して、ヨナスとハーバマスとのあいだにある相違と(ありうべき)つながりについてです。

第一点。ラフルーア先生は、ヨナスはユダヤの預言者の役割を賛嘆していたと指摘されました。私も同感です。『責任という原理』(4)における地球規模での生態系危機への警告、あるいはまた、対ナチス・ドイツ戦争への参戦を呼びかけるために彼が1939年に記したパンフレット「われわれとこの戦争との関わり。ユダヤ人男性への一言」(5)のなかに、彼の預言者的役割をみることができるようだと思います。実際、彼自身が自伝のなかで母の友人が「[ナチスの脅威に早く気づいた]あなたの息子さんは本当の預言者だ」といったと引いています(6)。しかし、彼の脳死論がユダヤ的伝統と関わりがあるとすれば、預言者への称賛ということは別として、ユダヤ的伝統のどのような規範がその実質的な根拠として引けるでしょうか。イスラエルは脳死を認めるのに遅かった国です。当然、ユダヤ教の影響でしょうが、はたしてヨナスは哲学者としてユダヤ教に依拠できたでしょうか(「哲学者でユダヤ人であることの緊張」(7)を抱えた哲学者として)。

生命倫理学に関するヨナスの主張の根拠を何に見出すのか。彼の生命倫理学の論稿の多くは『技術、医療、倫理』に収められています。その副題は「責任原理の实践」です(8)。しかし、彼の主張と責任原理との論理的つながりは明快ではありません。ですから、イタリアの法哲学者パオロ・ベッキのように、ヨナスの存在論ではなく、人格の尊重を論拠としたカント的な基礎づけで充分と解釈する論者もいます(9)。私にはそれで充分とは思えません(10)。しかし、生命に合目的性を見出す彼の生命哲学(11)と、未来世代と生態系の行く末を左右する力をもつゆえに現在世代の責任を訴える責任原理とのあいだで展開されたヨナスの生命倫理学への寄与は、生命哲学と責任原理のどれとどのように関わるのか、それとも、彼はアドホックな根拠で主張を展開したのかは依然として問題です。

第二点。ヨナスの知的人生を私は次のように解釈しています(12)。まず、彼はグノーシス思想と近代の実存思想のあいだに共通点を見出しました。それは(パスカルの宇宙における人間の孤独、ハイデガーの被投性が示しているような)宇宙ないし自然からの人間の乖離です。しかし、ナチスに寄与したハイデガーから離反した彼は、ハイデガーとグノーシス思想と逆の思想を確立しようとします。自然のなかに規範を見出す生命哲学がそれです。責任原理は、自然に内属している目的を尊重するという生命哲学の思想と、唯一、責任をとりうる存在者である人間の特異性とを支えています。そして晩年の神学的思索のなかでは、宇宙ないし自然を創造したが、その独立性のためにその後の進展には介入しない全能ならざる神と、自然を改変する力をもった人間の責任が語られます。

ラフルール先生がウォーリンのヨナス解釈の一面性を指摘されたことはまことに的確

です。しかし一方、ヨナスは「地上の最後のひとりが守るべき」(13)倫理を追求し、したがって、彼の倫理を人間同士の合意にではなく、存在論に基礎づけてもいます。ヨナス解釈についてそこから引き出される大きな難点は、アウシュヴィッツと環境危機とが同一の存在論ないし神学的議論のなかで論じられかねないという点です。この恐れは、ヨナスの論文「アウシュヴィッツ以後の神概念」と「物質、精神、創造」の構造上および内容上の共通点からともが裏付けられます(14)。ヴィーゼもまた、そうまとめた箇所があります(15)。私はヨナスの伝記筆者としてのヴィーゼを信頼しておりますが、この点では賛成できません。それでは、ヨナスは、全体主義も科学技術も「組み立て」や「歴運」という観念から説明したハイデガーと同じ失敗に陥ります。他方、ヨナスをハイデガーとはっきりと区別すべき点も彼のテキストのなかに見出せます。「ハイデガーと神学」のなかの「人間がその兄弟を守る者であることがみじめにもできなかつたときに、人間が存在の牧人として聖なる者とされるのは聞き入れがたい」(16)という一節がそれです。この方向を堅持するには、アウシュヴィッツと環境危機のそれぞれについて、誰がどのような、どれほどの責任を負っているのかの追求が必要でしょう(17)。しかし、それはヨナスの議論全体を存在論的というよりもむしろ（人間同士の間で成り立つ）責任原理によって解釈することにほかなりません。むしろ、存在論も責任原理もヨナスのなかにすでにあります。けれども、このような解釈の正当性はヨナスの両義的なテキストからは決定できません。つまり、ヨナスのなかに、受け継ぐべき点と批判すべき点とを分ける解釈になります。とはいえ、ヨナスをハイデガーの弟子とだけ位置づける解釈を避けるためには、こうした解釈が必要だと思えますが、ラフルーア先生はどのようにお考えでしょうか。

第三点。ハーバマスが『人間の将来とバイオエシックス』のなかでヨナスを援用したことが、アメリカにおいても、ヨナスに関心が向くきっかけとなったというご指摘には勇気づけられました。しかしまた、ハーバマスのあの著作には、ハーバマス自身の変容も窺われます。「人間の尊厳」だけではなく、「人間の生命の尊厳」という観念に訴えたがそれです。討議倫理学、そしてまた討議倫理学の祖のひとつであるカント（というのも、コミュニケーション共同体は哲学の言語論的転回のあとの「目的の王国」だからです）は前者を支持します。しかし、討議倫理学やカントが後者を擁護できるかどうかはわかりません。ハーバマスがそこまで進んだのは、私見では、「人格の尊厳を守るためには、人格が成り立つ自然的基礎(身体)を守る事が不可欠である」という認識があるように思います(18)。それゆえ、ハーバマスは彼の著書のなかでヨナスや、さらには(カトリックを背景にした)

ロベルト・シュペーマンに言及しています。これは、ハーバマスおよび討議倫理学が、特定の形而上学ないし存在論を前提とする議論は価値多元社会では道德の基礎づけとして役に立たないと考えるところからすると、意外な話です。実際、ヨナスが存在論に依拠している点は、討議倫理学者から繰り返し批判されてきました(19)。

さて、それでは、ハーバマスはヨナスから何を摂取したのでしょうか。彼の本のなかでのヨナスからの引用はヨナスのクローニング論文にかぎられています。ハーバマスは、出生以前の遺伝子への介入は介入された人間が自分の人生を自分で作り上げるのに干渉することだから許されないと主張しています(20)。これはヨナスがひとりひとりの生を「新たなもの」と叙述しているのに対応します(21)。けれども、ハーバマスは、コミュニケーション共同体のメンバーの発言の自己誠実性を確保するためにそう主張します。他方、ヨナスがそう主張するのは、彼が生き物の個体それぞれに形相を認めているからかもしれません。あるいは、ヨナスもまたハーバマスも引用しているアーレントの出生性と同じく、誕生する子どもの新しさを重視しているという点を強調したほうがいいかもしれません。だとすれば、(ハーバマスは引用していませんが)レヴィナスの来たるべき第三者としての子どもも含めて、そうした発想とユダヤ的伝統との関係は研究すべきテーマとなるでしょう。

しかし、依然として、ハーバマスとヨナスの間には隔たりがあります。私は以前、ヨナスの受容のタイプを四つに分類したことがあります(22)。第一は、彼の存在論を含めて積極的に評価する論者。シュペーマンやレーヴ、ヘスレがここに属します(23)。第二は、彼の存在論を省いてしまい、別の基礎づけ(たとえばカント)で代用し、彼の生命倫理学や環境倫理学に関する提言を継承する論者。ベッキやレンクがここに属します(24)。第三は、彼の責任原理には関心を寄せつつ、存在論による基礎づけを攻撃する論者(25)。討議倫理学者がそれです。最後に、私自身のスタンスを申せば、対等な関係に立脚する規範、たとえば正義や権利に立脚する近代の正統的な倫理的理論と不均衡な力関係が産み出す責任という規範に立脚するヨナスとを対比する立場です。ただし、この分類のもとでは、ヨナスの責任原理や生命哲学ないし存在論には焦点があてられますが、彼のグノーシス解釈や神学的思索、とくにユダヤの伝統とのかかわりは前面から退いてしまいますが。

ラフルーア先生、きょうのご講演では、ユダヤの伝統とヨナスの関わりに繰り返し言及されました。ヨナスのもっている多彩な側面のなかで、ラフルーア先生は、とくにヨナスのどの面を積極的に評価しようとしているのでしょうか。最後にここをお聞かせください。

註

- (1) Leon R. Kass, "Appreciating Phenomenon of Life", in *the Legacy of Hans Jonas, Hastings Center Report*, vol.25, n.7, 1995, pp.3-12
- (2) Leon R. Kass, *Beyond Therapy: Biotechnology and the Pursuit of Happiness, A Report of the President's Council on Bioethics*, Dana Press, 2003
- (3) Hans Jonas, "Heidegger and Theology", in *the Review of Metaphysics*, vol. XVIII, no.2, 1964.
- (4) Hans Jonas, *Das Prinzip Verantwortung. Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*, Suhrkamp, 1979 (『責任という原理 科学技術文明のための倫理学の試み』、加藤尚武監訳、東信堂、2000年)
- (5) Hans Jonas, *Erinnerungen*, Insel Verlag, 2003, S.186-S.199
- (6) *ibid.* S.73
- (7) Herlinde Koelbl (ed.), *Jüdische Portraits: Photographien und Interviews von Herlinde Koelbl*, S. Fisher, 1989, S.123. ヨナスはこのインタビューのなかでこういっている。「哲学者でありユダヤ人であることには、一種の緊張があります」
- (8) Hans Jonas, *Technik, Medizin und Ethik. Praxis des Prinzips Verantwortung*, Suhrkamp, 1987
- (9) Paolo Becchi, "Theorie und Praxis des Prinzips Verantwortung bei Hans Jonas", the manuscript for the lecture at Shibaura Kougyou Daigaku in Tokyo on October 31 2004
- (10) 品川哲彦、『正義と境を接するもの 責任という原理とケアの倫理』、ナカニシヤ出版、2007年、121-127頁。
- (11) Hans Jonas, *The Phenomenon of Life. Toward a philosophical Biology*, Northwestern University Press, 2001 (ドイツ語版の邦訳として、『生命の哲学 有機体と自由』、細見和之・吉本陵訳、法政大学出版局、2008年)
- (12) 品川哲彦、「ヨナスの アウシュヴィッツ以後の神 概念(一) ユダヤ人で哲学者であること」、『文学論集』58巻2号、関西大学文学会、2008年、1-23頁
- (13) Hans Jonas, *Das Prinzip Leben. Ansätze zu einer philosophischen Biologie*, Suhrkamp, 1997, S.403
- (14) Hans Jonas, "Der Gottesbegriff nach Auschwitz" und "Materie, Geist, und

Schöpfung”, in *Philosophische Untersuchungen und metaphysische Vermutungen*, Insel Verlag, 1992 (『アウシュヴィッツ以後の神』、品川哲彦訳、法政大学出版局、2009年刊行予定)

(15) Christian Wiese, “Nachwort”, in Hans Jonas, *Erinnerungen*, Insel Verlag, 2003, S.422.

(16) Hans Jonas, “Heidegger and Theology”, p.229

(17) 品川哲彦、「ヨナスの アウシュヴィッツ以後の神 概念(二) 全能ならざる神と人間の責任」、『文学論集』58巻4号、関西大学文学会、2009年近刊、1-24頁

(18) 品川哲彦、『正義と境を接するもの 責任という原理とケアの倫理』、90,107-108頁。

(19) 同上、第2、5、6章。

(20) Jürgen Habermas, *Die Zukunft der menschlichen Natur. Auf dem Weg zu einer liberalen Eugenik?*, Suhrkamp, 2002, S.103

(21) Hans Jonas, “Lasst uns einen Menschen klonieren“, in *Philosophische Untersuchungen und metaphysische Vermutungen* S.188

(22) 品川哲彦、『正義と境を接するもの 責任という原理とケアの倫理』、第6章

(23) Robert Spaemann und Reinhold Löw, *Natürliche Ziele. Geschichte und Widerentdeckung des teleologischen Denkens*, Klett-Cotta, 2005: Vittorio Hösle, „Ontologie und Ethik“, in *Ethik für die Zukunft. Im Diskurs mit Hans Jonas*, Dietrich Böhler (hrsg.), Verlag C.H. Beck,1994, derselben, „Zum Verhältnis von Metaphysik des Lebendigen und allgemeine Metaphysik. Betrachtungen in kritischen Anschluss an Schopenhauer“, in *Herausforderungen und Möglichkeiten*, Hösle (hrsg.) Frommann-Holzboog Verlag, 2002

(24) Hans Lenk, „Macht und Verantwortung“, in *Ethik für die Zukunft. Im Diskurs mit Hans Jonas*, Ethik für die Zukunft.

(25) Karl-Otto Apel, „Die ökologische Krisis als Herausforderung für Diskursethik“, in *Ethik für die Zukunft. Im Diskurs mit Hans Jonas*: Holger Burckhart, „Überwindung der metaphysisch-heuristischen Grundlegung der Verantwortungsethik bei Hans Jonas“, in 『現代の生命観と自然観に対する哲学的倫理的再検討』、坂井昭宏編、北海道大学、2002: Wolfgang Kuhlmann, „Prinzip Verantwortung versus Diskursethik“, in *Ethik für die Zukunft. Im Diskurs mit Hans Jonas*: Micha H. Werner,

„Dimension der Verantwortung; Ein Werkstattbericht zur Zukunftsethik von Hans Jonas“, in demselben.